

内藤博夫

1983年10月7日、イギリス・ヨークシャー羊毛工業の中心地リーズに向う途中でヨークに一泊した。知人から中世都市の面影をとどめるヨークをぜひ見ておくようにすすめられていたためである。城壁でとり囲まれたヨークの街は観光地といわれながらもけばけばしさのない落ち着いた雰囲気をもっていた。またヨークミンスターと呼ばれる大聖堂の豪華さには目を見張らされた。ロンドンの旅行案内所を通じて予約してあったホテルはレンガ造り2階建ての民家を改造したもので、日本流に言えば民宿に相当する。しかし夕食を用意する施設はないので外でそれをとることにした。ホテルの女主人はヨーク駅付近のイタリア料理店と中華料理店をすすめてくれたが、横文字のメニューを見て注文する自信はなかったので中華料理店に入ることにした。店の名前は北京亭、小柄な中国人ウェイトレスがてきばきと客の注文に応じていた。

10月9日、イギリス旅行を終えてパリに移動した。午後1時に「大学都市」地区にある日本館を訪ね、館長をしておられる東大の小堀巖先生にお会いして「大学都市」および日本館の概要をうかがった。この地区には各国の留学生会館が思い思いの建築様式で設置されていて、その歴史は50年にも及ぶという。このような施設のために用地を提供し、パリの一角に「大学都市」を作り出した当時のフランス政府の国際感覚と文化行政の水準の高さにあらためて敬服した。日本館を辞去し、市内を散策したあと夕食をとる段となったが、1981年にパリを訪問したときに利用した中華料理店を今回も利用しようと思い、以前泊ったホテルの前にさしかかったところ、1階の一部が日本料理店に改造されていることに気がついた。そこは泊り客がパンとコーヒーの朝食をとる喫茶室がおかれていたところである。目ざす中華料理店はあいにく休業日だったので渡りに舟とばかりにこの日本料理店に入

り、お茶づけ御飯で夕食をすませた。もちろんウェイトレスはあてやかな和服姿の日本人女性。客の数は10人前後で客の入り具合はまずまずの状態であったが、フランス人の女性客が1人いたほかはすべて日本人であったことが気になった。パリで開店しているとはいっても基本的には日本人観光客相手の食堂にすぎないように見受けられたからである。

10月10日、パリから急行列車で国際会議の開かれるリールへ移動した。ホテルに着いたのは午後7時頃だったので荷物を部屋に降ろすとすぐに夕食をとり外に出た。幸いホテルのすぐ向いに中華料理店があった。その名も北京亭、ヨークの店の名前と同じである。さっそく店の中に入ると20代後半と思われるウェイトレスが英語で注文聞きにきたので、ついでにこちらからも出身地などをたずねてみた。彼と彼の家族はカンボジアで食堂を営んでいたが戦争のためにフランスにやってきたという。つまり彼らはカンボジア革命戦争の過程で生じた難民の一部であり、かつてのカンボジア植民地宗主国であるフランスに落ちのびてきたのである。人口17万余りのリールで、経営がなり立つのかどうか質問すると、市内には同業者が13軒あるくらいだから大丈夫だという。フランス人相手に、しかも1地方都市でこれだけの数の中華料理店が営業しているとは思ってもいなかった。ヨークとリールで見たと同じように中華料理はヨーロッパの社会の中に深く根を下ろしているように思われる。油と肉をふんだんに使う中華料理はヨーロッパ人の味覚に合う面をもっているのかも知れない。それに比べて日本料理はヨーロッパの人たちからみればまだ異質なものに映っているのだろう。料理も文化の1表現であるとするれば、料理の受容のされ方を通じて日本文化の特殊性と中国文化の底力について考えさせられた旅行だった。

## 東京と江戸の大雪

三上岳彦

今年(1984年)の1月、東京では3回の大雪に見舞われた。月平均気温も3.7°と平年よりも1°低く、例年になく寒さの厳しい冬であった。東京で大雪が降るために

は、日本の南岸近くを低気圧が発達しながら通過する時、上空に北からの寒気が流入することが必要である。低気圧が接近しすぎて暖気が侵入したり、北からの寒気が弱

い場合には雨になることが多い。低気圧が通過してしまうと、西高東低の冬型気圧配置に戻って太平洋側は晴天となるため、日本海側地方のように何日間も雪が降り続くといったことは起こらない。したがって、大雪といっても積雪深1mを越すようなことはない。

ところで、東京では過去において一体どの程度の大雪が降ったことがあるのだろうか。また、最近では暖冬が多い上に都市気候も重なって大雪が降りにくくなっているようだが、そうした影響のなかった江戸時代には果たして大雪が多かったのだろうか。若干の資料をもとに、過去の東京の大雪について述べてみたい。

1876年(明治9年)に東京管区気象台が開設されて以来の最深積雪記録は、1883年2月8日の46cmである。これは気象台の露場における観測値であるから、都内でも場所によってはもっと積もったと思われる。ちなみに、新聞集成明治編年史から2月9日付の東京日々新聞の記事を引用すると、「一昨々六日は昨日春立ちし甲斐ありて、天気いと長閑かに風さへ無くて夜に入ても星の光り限なければ、明日の日和も好るべしと思ひしに似ず、七日の午前二時頃より空の気色忽ち変て四時過より雲の降り出で、五時頃より全くの雪となりぬ。(中略)夜半許には一尺の上に満たるが、此頃より風は増々荒く雪はいよいよ降頻りて、本社の前なる銀座の通も一人一人も往交ふを見ず、(中略)戸外に出れば扱も降積みにけり。軒下の雪除ある所にては三尺に近く満たれば、況て往來の風の吹溜る所にては、五尺より六尺にも及びたらんか」といった具合である。気象台の観測値46cmは一尺四寸に相当するから、文中の三尺に近い積雪というのは明らかに過大な数字といえよう。無論、積雪深には地域差があるから、都内でも場所によっては1m近く積もったのかもしれない。

ところで、東京では一体どのくらい積雪があると大雪と呼ぶのだろうか。5cm程度の積雪でも、交通に混乱を起こすようであれば大雪といえるかもしれない。江戸時代の記録をみると、「江戸大雪、積る事一尺余」といった記述が目につく。単純にメートル法に換算すれば、約30cmということになるが、前述の例のように過大に見積もっているということも考えられる。そこで、仮に積雪深20cm以上を大雪と定義して過去の記録を調べてみると、1876年の観測開始以来これまでに合計で21回の大雪が降ったという結果になる。5年に1回という割合である。これを月別にみると、1月は6回、2月は12回、3月は2回、4月は1回となり、12月に20cm以上の積雪は記録されていない。やはり、東京では2月にもっとも大雪が降りやすいということがわかる。次に、全期間を、1930年を境にして、前半の54年間と後半の54年間に分けて、その出現回数を比較してみると、前半が12回、後半が9回とやや減少の傾向が読みとれる。

そこで、さらに逆のぼって江戸時代の大雪について調べてみた。前にも述べたように、正確な積雪深はわからないが、史料等の記述からある程度の推測は可能である。「日本の気象史料(2)」(原書房)から、一尺以上の積雪記録をとり上げてその出現回数を数えてみよう。1633年以降についてみると、1876年までの243年間における大雪回数は62回に達する。およそ4年に1回の割合である。やはり、小氷期に相当する江戸時代は、現在よりも大雪が降りやすかったのだろうか。それとも、都市気候の影響で東京には大雪が降りにくくなっているのだろうか。あるいは、江戸時代の人々が積雪深を過大に見積もっていたのだろうか。気候変動を考える上での興味ある課題の一つである。

## スペインの「地域主義」

栗原 尚子

ちょうど今、スペインの「地域主義」の問題に取り組んでそのまとめに四苦八苦しているところである。低開発諸国の少数民族のナショナリズムに対する関心に触発されて、先進諸国における同様の問題が地理学の分野においても注目されるようになったのは1970年代に入ってからであった。19世紀後半以降の民族国家形成にかかわる諸理論の再検討を基本には含んでいる。

私がこのテーマに関心をもちた背景には、スペインに

おいて体験した各々の地域に対する人々の帰属意識の強さにひかれたことがある。1977年9月、初めてバルセロナの地を踏んだとき、約40年ぶりの自治権回復でバルセロナはわきかえっていた。都心部の高窓建築の窓々からシンボルである赤と黄の縞模様のカタルーニャ旗が掲げられ、新しい政治体制への期待がみなぎっていた。大寺院にはカタラン語によるミサの時間割がはり出されていた。カタルーニャ旗の掲揚も公的場でのカタラン語の使